

孤独の諸相——佐多稲子『樹影』における被爆意識の変遷

村上陽子

一 『樹影』について

佐多稲子『樹影』は一九七〇年八月から二一回にわたって『群像』に連載され、連載終了後の一九七二年九月、講談社より単行本として刊行された。また、同年一二月に野間文芸賞受賞を受賞している。華僑であり、喫茶店「茉莉花」の女主人でもある柳慶子と、日本人画家の麻田晋の恋愛関係を縦糸、放射能の脅威が明らかになるにつれて高まる原爆症発症への不安や孤独、慶子の華僑としての意識のあり方を横糸として、長崎を舞台に一九四八年の夏から一九六七年の秋の終わりまでの一九年間を織りなした大作である。

『樹影』についての批評をたどると、いくつかの論点がくりかえし浮上していることが見て取れる。まず、全二二章で構成されるこの作品の最後の部分、一八〇二二章に対する批判がある。原爆症に不安を感じつづけた麻田はやがて腎臓癌を発症し、急激に

症状を悪化させて一七章で死を迎える。一八〇二二章は麻田の死後、原水禁運動や日中友好の活動にのめりこみ、その活動によってかえって新地の華僑コミュニティから孤立した慶子が突然の病死を遂げるまでが描かれる部分だ。麻田の生前は二人の心理のひだや生活感情が微細に描かれていたが、一八〇二二章では国際的な政治状況とそれに翻弄される日本国内の運動が慶子に強い影響を及ぼしていくためか、それ以前の章とは「違う次元の問題という印象を受ける」(三浦朱門)^①などの批判があった。野間文芸賞選考時にも一八〇二二章への評価はわかれ、「しまいの方の政治問題を採り上げた所で、せつかくのイメージが損われるような気がして少しばかり残念だった」(石坂洋次郎)、「選考中、一部には「樹影」の後半に思想運動や政治運動に触れているのが、この作品の邪魔になっているという批評もありましたが、そんなことはありません。あそこがあるから佐多文学になっているので、あれがないと哀れな二人の愛と、死の叙情性だけが浮き出してしまうのではないのでしょうか」(舟橋聖二)と賛否両論であった^②。本稿では主

に麻田と慶子の被爆に対する意識の変遷に注目していくが、その視点から見ると一八〇二一章には麻田の死後、彼の孤独を感じつつた慶子が、自分も被爆者であるということ強く意識しながら、同時に華僑としての自分がいかに生きるかを模索していく過程が描かれていると言える。よって、自己をとらえなおし、表現しようとする慶子の生き方を示す一八〇二一章は、蛇足などではなく『樹影』という作品に欠くことのできない部分であると考える。

次に、麻田の家族、特に麻田の妻の邦子への言及が欠如しているという指摘がある⁵⁾。しかしたとえば渡辺澄子は、「主人公（慶子）には作者の感情移入がなされていて、その心理のすみずみまでよく表現されているのに比べて、この人物（邦子）を描く作者の筆は冷淡である。私はいつか作者の冷淡さに反抗するかのようこの人物の中に自分をおいて、その感情や心理に思いを寄せていった」と指摘し、些細な記述から邦子の性格や心情を読みとり、麻田の「美德であるはずの誠実さは、同時に他面では邦子に、そして子どもたちに、さらに慶子にも鋭い傷を負わせる不誠実と一枚の紙の表裏となつている」ことを浮き彫りにしていく⁶⁾。このような読みが成立することは、少ない記述の中で邦子という女性が十分に重みを持つ存在として『樹影』にあらわれていることの証左だと言えるだろう。邦子は空のがま口の口を開けて見えるところに置いておいたり、麻田の食事を整えなかつたりという家庭内での行動や、レジスタンスに加わるという麻田とは別のかたちでの社会への参加によってその気質を表現されている。邦子の内面が推し量られるものでしかないだけに、しばしば触れられる彼女の行為が重要なものとなっている。

最後に、『樹影』における孤独の問題がある。『樹影』はしばしば被爆者の孤独を描いた作品だと評価されてきた。佐多稲子自身も自作について次のように語っている。

あれはまた原爆の問題でねえ、原爆を受けた人達の虚無感みたいなものは、私、八月の朝日新聞にも書いたけれども、被爆した人達は孤独なんだと思うわ。だつてどうしたつて我々には察しられないもの。かなり察しているつもり私でさえも、大変鈍感だったことに気づいたようなことであつて、そりゃあ、あの人たちは大変孤独感があるんだと思う。だから私、林京子さんの作品読んでも、竹西寛子さんの作品読んでもそう思つた。あの放射能は、体の中にすうつと通つちゃつて、あと残らないわけだけど、通つていつただけの痕跡は残して、中を冒していくわけでしょう。それを浴びた人は、中を冒されたものを抱えて生きるわけでしょう。それは目に見えないんだし、それを受けなかつた人は分らないと思うんだなあ。だから受けた人は本当に孤独で隔離感があるんだと思うの、受けなかつた人との間に。そこまでは私、少くとも分りたいと思つて分るような気がするの。そりゃもう今の社会の他の差別の問題にしても言えることだと思ふけど。⁶⁾

ここで佐多が語っているのは、被爆者／非被爆者の間に生じる隔絶感と、「察しられない」、「分らない」ということを非被爆者として「分りたい」という心情である。小田切秀雄も「被爆者のほとんど絶対的な孤独の意識、戦前からの華僑としての被差別による屈折

した孤独の内面性、これらが執拗に掘り下げられていて、従来のいかなる文学作品もこれらをここまで明らかにするということではできなかった」と『樹影』を評し、「被爆者の孤独を、非被爆者であるわたしたちがほんとうのところで知ることができるか」という問いにつなげている。佐多も小田切も、被爆者の孤独な内面が非被爆者には完全には理解できないものとしてあるという立場からこれらの言葉を発している。そして『樹影』冒頭の「あの人たちは何も語らなかつただろうか。あの人たちは本当に何も語らなかつただろうか」という問いかけは、まさにこのような問いを非被爆者としての読者に投げかけるものであつただろう。

しかし興味深いことに、『樹影』で描かれる孤独は、被爆者と非被爆者の間に生じるものではない。むしろ慶子や麻田は、自分は被爆者ではないと思いつづけてきた。しかし原爆の影響が次第に明らかになるにつれて、二人はそれぞれ自分の被爆体験を省みて体調不良との因果関係に思いをはせる。そしてそのたびに、自分は被爆者ではないと不安を打ち消していくのである。後に入市被爆者として原爆手帖を交付されることになる慶子と麻田は、被爆直後にはわからなかつた危険性が明らかにされればされるほど自分が被爆者であることを否定する。放射能を浴びたのは自分一人ではないと思い、被爆者として生きざるをえなかつた人々と自分を区別して考えようとする慶子と麻田の心理は、二人の間ですらほとんど共有されていない。これは決して被爆者に対する非被爆者の理解のなさという問題に留まるものではないはずだ。

無論、二人の孤独には慶子と妻子ある麻田の軋轢も関係している。しかし本稿ではまず、慶子と麻田の被爆に対する意識の変遷

に注目し、それが慶子の華僑としての意識とそれがどのように関係していたのかをたどりながら、『樹影』における孤独が被爆者の孤独としてひとくりにできるものではなく、個々の人間に伏在していたものであることを確認していききたい。その作業を通して、これまで非被爆者には理解されない被爆者の孤独を描いた作品とされてきた『樹影』の孤独を、ひとりひとりの存在に刻まれたものとしてとらえなおしていく。

二 「あの人たち」と「この人たち」

あの人たちは何も語らなかつただろうか。あの人たちは本当に何も語らなかつただろうか。あの人たちはたしかに饒舌ではなかつた。それはあの人たちの人柄に先ずよつていた。内側に、ある気むずかしさを持つていたのにはちがいがなかつたが、それを自分で、はにかんでいるような優しさがあつて、この人たちのおしゃべりでないのは、たしかに先ずさういう人柄のせいだつた。あるいはこの人たちは、おたがいの間でさえ、本当に自分の心の中にあるものを、言葉で明かし合つてはいなかつたかもしれない。この人たちのどちらにも相手をかばうものと、押えられた苛立ちとがあつて、それがこの人たちの言葉をとぎしていたかもしれない。この人たちはおたがいのかばう気持と、押えている苛立ちについてさえ、わが身を責めるということにすりかえていたと言えないだろうか。この人たちの愛のかたちが、世間的に正常でないということは、その日その日のこまかな實際で感情をゆすり、そこ

にむしろ身を任せていることにもなつたに違いない。それはこの人たちの心のどこかで甘い蔽いの役をした。この蔽いによつて、この人たちは自分の心のもつと深部にひそむ苛立ちと恐怖を押えていたといえようか。それは人間の毎日というものの当然さであつた。だからこの人たちは饒舌ではなかつた。むしろ殆ど、言葉には出さぬものであつた。それほどこの人たちの苛立ちと恐怖は二人の間でさえ形になし得ないのであつた。それはただ微妙なかげりとして意識されつつ自分自身をさえ瞞著するものであつたろう。この折り重なつた屈折はこの人たちの十年の月日を貫いて流れ、やがておたがいの悲哀のうちにあらわになつてゆきながら、遂にはそのかげりによつておたがいの引裂かれていたことに気づくしかなかつたのであろう。⁶⁾

『樹影』は右の引用の通り、「あの人たちは何も語らなかつただろうか。あの人たちは本当に何も語らなかつただろうか」と繰り返される問いかけによつてはじまる。そして次第に「あの人たちが」「この人たちが」に収斂していく。「この人たちが」が慶子と麻田を指していることは、彼らの「愛のかたち」や言葉に置き換えられない思いが「かげり」となつて二人を引き裂いていくという描写から明らかになつてゐる。それでは、「あの人たちが」には、「この人たちが」以外どのような存在を含まれてゐるのだろうか。引用部に引きつづいて語られるのは、戦後三年目の夏の長崎の状況である。そこでは「傷痕はどの町にもまだ生々しく」、「長崎の多くの人々がまた、ものを云う氣力を持ち得なかつた」とされて

いる。「あの人たちが」が、もの云う氣力を持ちえない「長崎の多くの人」を指すならば、そこには「病院と病院の外の町中にちらばつて伏在」してゐた被爆者たち、すなわち「下半身の自由を失つた娘」⁶⁾や、「表情を凝結」させた「顔を焼かれた若もの」が含まれてゐるはずだ。彼女らは原爆で大きな傷を負い、被爆者であることを常に突きつけられながら原爆以後の生を生きねばならなかつた人々である。

「ものを云う氣力」を持ちえずに伏在してゐた「あの人たちが」が見出されたきっかけは、一九五四年三月一日のピキニ環礁でのアメリカの水爆実験によつて引き起こされた第五福竜丸乗組員の被爆と死だつた。原水爆実験禁止署名運動が全国的な広がりを見せる中、長崎でも「長崎母の会」が発足した。やがて母の会の活動を通して孤独のうちに被爆の痛みを抱えこんできた「あの人たちが」の存在が見出され、新聞で取り上げられた。そのうちの一人に、あの「下半身の自由を失つた娘」がいた。「学徒動員で働いてゐた工場で、原爆に倒れた鉄筋のはりの下敷きになつて、そのまま下半身の神経が切れてしまつた」彼女は、被爆当時一六歳の少女だつたという。のちに彼女が一九五六年に長崎で開催された第二回原水爆禁止世界大会で発言をしたことも『樹影』の中で触れられてゐる。

しかし慶子と麻田、つまり「この人たちが」はこの時期にはまだ自分が被爆者だと自覚してゐなかつた。慶子と麻田が相次いで肺浸潤の診断を受けたのは一九四九年のことである。二人は弱つた体を勞りあい、関係を深めていくのだが、このときはまだ「長崎だからという特別なものが、どう関つてゐないかなどとはおもひ

つくことでもなかった」。第五福竜丸事件以降、死の灰の危険性が新聞で取り上げられるたびに丹念に読んでいた慶子は、自分の体調を省みて不安を感じるが、すぐにその不安から目を背ける。そのため慶子と麻田にとつて、第二回原水爆禁止世界大会は「表面上は何のつながりもなかった」。しかしこのとき初めて、原爆投下時の慶子の体験が想起される。慶子は原爆投下から七日後に知人の倉庫にあずけてあった荷物を引き取るために爆心地を突っ切つて往復し、「非現実の様相」を目の当たりにしていた。また、麻田も原爆投下から一夜明けて甥を探すために長崎に入り、数日間街を歩き廻つた体験を持っていた。しかし慶子が「被爆者ではないから、大会へ寄せる気持もいわば理性的でいられた」（傍点引用者）とされているように、原爆投下直後の様相を知らない二人は、「ケロイドを残した被爆者たち」と自分を隔てる一線を見出している。

一九四八年から一九五六年にかけての『樹影』の描写をたどつていくと、被爆と自分たちを結びつける視点を持たなかつた慶子と麻田が、死の灰の影響や第二回原水爆禁止世界大会によつてもたらされた長崎の町の空気に揺さぶられつつあり、しかしそこからあえて身を引こうとする身振りが感じられる。一方、沈黙し、伏在していた「あの人たち」の中から声を上げる人が出はじめ、「あの人たち」の存在を知りながらも顔を背けていた長崎という町もまた、原爆の問題に向き合うことを迫られたことがわかる。しかし、伏在していた「あの人たち」が表舞台に立つことになつたとき、「あの人たち」の個別の心情や思いが原水爆禁止運動の盛り上がるの底に沈められていったことも『樹影』の語りは見逃

してはいない。

顔にケロイドを残した被爆者たちの心情は、この街で原水爆禁止世界大会が開かれたということで激しく揺れていたろう。長崎の原爆青年乙女の会に会員たちも会場係りその他で活動していた。傷痕を面てに、うなじに、焼きつけた青年たちである。

若い意識は飛躍を経験したのちがいない。大会開催前から準備のためにも連日会合し、活動をつづけた男女の青年たちであった。が、大会を明日に控えた夜、この会員のひとりの女性が自殺した。大会を前にしたこの突然の死にどんな理由が伏在したのか一般にわかることではなかつた。しかしどんな理由が挙げられたにせよ、その死は、彼女たちの揺れ動く苦しい心情を傷ましくのぞかせなかつたらうか。その死の抱えていた苦悩は、大会の活気の中で底に沈んだ。（傍点引用者）

「下半身の自由を失つた娘」や「顔にケロイドを残した被爆者たち」など、目に見える原爆の傷から逃れようのなかつた人々にとつて、生々しい体験の記憶、孤独に痛みを抱えた十年は原水爆禁止運動の高まりにたやすく接続できるものではなかつた。運動の中であらためて生き直そうとしていた人々の中に、せめぎあう思いを抱えて痛みを自らの内に封じこめるようにして死んでいったひとりの死者がいたことをこの語りは示そうとしている。

「あの人たち」という呼びかけは、慶子と麻田という「この人たち」に留まらず、伏在する痛みを抱えて町のあちこちで生きていたひとりひとりの孤独な被爆者、あえて原爆について語らずに

来た長崎の人々を含みこんでいる。被爆者である、と突きつけられること、それを引き受けて生きていくことは、「あの人たち」にとつて身動きがとれなくなるような怖れと孤独をもたらしただけではなかったか。「あの人たち」が原水禁運動の中で声を上げることは、被爆者としてまなざされ、被爆者としての自分を語る言葉を探すことにほかならなかったはずである。しかし、「あの人たちは何も語らなかつただろうか。あの人たちは本当に何も語らなかつただろうか」という問いかけは、「あの人たち」の声がいまだ発せられていない、少なくとも明確な語りとして形成されておらず、それゆえにわたしたちに届いていないという状況を踏まえてなされている。目に見える傷や耳に届く声としてではなく、自殺や沈黙、鬱屈する孤独としてあらわれた伏在するひとりひとりの痛みを、「あの人たち」と呼びかけるしかない位置にいるわたしたち——非被爆者——は常に受け取りそこねているのではないか。そのような問いが『樹影』の冒頭に置かれ、「あの人たち」のうちの個別の存在として「この人たち」——慶子と麻田——の生と死が語られていくのである。

三 麻田の不安と死

ひとりひとりの孤独という問題は、やはり「この人たち」の関係を通して、特に麻田が発病し、死去する一九五八年から一九六〇年にかけて如実にあらわれる。一九五八年、長崎に原爆病院ができて調査などが行われるようになっていた。白血病以外の、潜伏性の原爆症や残存放射能の問題が明らかになってきて、「被爆

の条件がいわば間接的な範囲にまで拡大された」ことが長崎市民の関心を呼んでいた。そんなとき、麻田の左手首に紫斑ができる。「一カ所に定期的に出る」わけでなければ心配せずともよいと医師に言われたことで一度は麻田の不安も晴れ、慶子も自分たちが「神経質」になりすぎていると感じた。

だが、麻田はこの時期から言いしれない不安に呑みこまれていった。それまで気にも留めていなかった被爆時や被爆直後の自分の行動、忘れていた記憶などが頭をもたげて麻田を苛む。以下の麻田の悪夢は、そのような不安のあらわれの一つである。

彼は夢の中で、弟と二人で西山の疎開事務所の裏手の山に入り込んでいた。弟は復員服をきていた。彼は一升びんを抱いて弟の先きに立っていた。彼が行こうとしているのはこの製鋼所の油のプールだった。妙に不気味に暗い空の下であたりに人氣はなく、しんかんとしていた。巨大なプールにたたえてある油の表面が、どろろと沈んだ光りを放っている。麻田はプールの端にかがんで、油の中に一升びんを入れ、そして首だけうしろへ向けて弟を呼ぼうとしたのだ。その瞬間、彼の手から一升びんが抜け、それを追おうとして彼は、油の中へのめり込んだのである。声を上げたのはその時だった。プールへ落ちるというだけでなくそれがぬるっとした植物油の中だということ、そのまま深い油の底へ引込まれる感じが、何とも云えぬ恐怖であった。

この夢は、戦後まもない時期の麻田の実際の体験に基づいてい

る。放射能雨が集中的に降った西山地区にあるプールから取ってきた油を食用にしたことを麻田は思い起こし、家族からも、慶子からも隔たった場所に「自分ひとり」がいるという恐怖を感じる。これ以降、麻田は自分が残留放射能の影響を受けているのではないかという不安を高じさせていくのだが、やや奇妙に思われるのは、このとき麻田が周囲の人間に対する原爆の影響にまったく思いついていないことである。

たとえば、終戦一カ月後に呉から復員してきた弟が、麻田とともに油を取りに行きながら自分はそれを口にしなかったとは考えにくい。しかし麻田は、弟や妻の邦子、普段はかわいがっている子どもたちの体を気遣うこともない。後に慶子の手足に斑点が出て彼女に原爆手帖が交付されたときにすら麻田は「君が、原子病になるくらいなら、とつくにその前に、僕がなつとるよ」と言い放つのである。

無論、これを慶子との関係が元で家庭に居場所がなく、かいつて慶子との関係だけに身を投じることができずにいた当時の麻田の状況がもたらした孤独と結びつけることはたやすい。だが、ここではむしろ、麻田が周囲の人間への被爆の影響に思い至ることがないのは、麻田の被爆体験が本質的に個人的なものだという問題が背景にあるためだと考えてみたい。麻田は一九四五年八月十日の夜明け、中学生の甥を探すため、難を逃れた家族を家に残して爆心地に出かけていった。甥は見つからなかったが、その過程で膨大な死者と負傷者に接した麻田は友人を探し、爆心地に通いつめて死体を発掘し並べるといって「作業」を熱心に行った。それは麻田一人の体験であり、傍らに弟も妻子も慶子も存在してい

ないのである。そして麻田の想起の中で、爆心地の圧倒的な現実に打ちのめされながら一人「作業」を行った体験と弟とともに油のプールに忍びこんだ体験はゆるやかにつながっている。残留放射能のうずまく爆心地での連日の「作業」、黒い雨が集中的に降った油の摂取、そのような連想は、麻田に「自分ひとり」の体に放射能がどんどん降り積もっていくイメージをもたらしたに違いない。爆心地に通いつめていた別の場所にいた家族も、七日後に爆心地を往復しただけの慶子も、呉から復員してきた弟も、麻田の中で自分の置かれた状況に結びついてはこなかった。誰に強いられなくてもなく、突き動かされるように行った「作業」は麻田に自身の責任として送り返され、深い後悔と孤独につながっていた。

そしてもうひとつ、麻田にとつては原爆や体調不良、不安が絵のモチーフになるものではなかったという問題があった。麻田にとつて原爆は「大きな石塊」となつて精神と感覚の「自由な羽ばたき」を押さえつけるものでしかなかった。「広島島の怒りを書きつづける作家、この街の傷痕をよむ詩人、その人たちの心情というものが今、念頭に浮かぶが、麻田は心理の操作でそれをまた追いやった。小説と絵はちがう」という彼は、自分は被爆者ではないと自らに言い聞かせる。そのような麻田にとつて、被爆者としての表現やあるいはほかの被爆者との連帯などは選ぶことのできないものだった。自分は違う、被爆者ではないという否定を重ねながらも放射能の影響を意識の外に追いやることができず、画壇からも認められずに焦りを感じる麻田は、次第にモチーフを見失い、色感のよさに定評のあつた彼の絵も色のない、孤独と虚無を表現

したものになつていく。

一九六〇年六月末、「僕の病気は、原爆と関係があつたかも知れん」と慶子に弱気を見せた麻田は七月に入院、原爆手帖を交付され、八月に肝臓癌で死亡する。死亡診断書には「原爆症」と記載された。

四 被爆者ではない／被爆者である

身体に生じた斑点のため、慶子に原爆手帖が交付されたのは麻田の生前のことである。被爆者であるという認定を受けたのは、麻田よりも慶子の方が早かった。麻田の死後、被爆者の健康診断を受ける場で、慶子は原爆手帖を持つ人々が寄り合ったことで生じる「被爆という空気に引きずり込まれ、自分のうちにのめりこんでゆく沈鬱な思い気持」に堪える。

麻田が悪夢や自分自身の体験に引きこまれ、それを共有できる存在を側に持たなかつたために孤立していったのとは異なり、慶子を引きずりこんでいくのはいつも彼女の周囲に漂う「空気」だった。慶子が女主人をつとめる喫茶店「茉莉花」には、麻田や彼の友人たち、原水爆禁止世界大会の盛り上がりの中で体験を語りはじめた長崎の人々、新地の人々などが出入りし、そのときどきの「空気」を持ちこんでくる。客のひとりひとりにこまやかに気配をし、話を傾ける慶子はこの「空気」に極めて敏感である。ただし慶子は店に持ちこまれる「空気」に安易に同調して行くわけではなく、「空気」を感じ取るたびに自分の立場やあり方を見つめ、次第に自らを変化させていった。

被爆者の健康診断の場においても、普通に生活している人々が胸の中に押しこめている不安や原爆症の噂、健康に太鼓判を押されたあとの安堵感などが形成する「被爆という空気」が否応なく慶子を引きずりこんでいく。そして慶子はこのあと、麻田を原爆の影響で失ったということに重きを置きながら被爆に対する自分の意識を変化させていくことになる。一九六三年、慶子は原水爆運動の活動に加わる。このとき慶子は「外の動き」という大きな時代の「空気」に突き動かされながら、死別に際して埋めようのない隔たりを感じた麻田に被爆者であることを通して近接しようとしていた。

慶子は、今自分が外の動きに誘い出されるのは麻田亡きあとの虚しさからと思うとき、それは麻田晋が彼女の中に養ったものでもある、とそこに思いを寄せ掛けた。たしかにそうでないことはない。が、麻田晋が原爆症で死なねばならなかつたという残念さは彼女にこびりついて硬直していた。彼女は自分も被爆者のひとりという意識を浮び上がらせている。それは慶子の今になって、麻田と同じ立場に立とうとしていることでもあった。昨年から彼女が原水爆運動の活動に加わったのも、その意識からであった。(傍点引用者)

ここで慶子は長年抱きつづけてきた被爆者ではないという意識と決別し、原爆症で死んだ麻田と同じ立場に立とうとして自分が被爆者であるという意識を獲得していったことがわかる。しかし被爆者ではない生を貫こうとあがいた麻田に、被爆者であること

を通して近接しようとするのは困難を極める。麻田が原爆症であることと診断されたのはその死後のことであり、慶子は被爆者であることを通して麻田が生きていることはできなかった領域に足を踏み入れていく。そして慶子は、いかに「空気に」敏感でも、その「空気に」の中で自分自身がどうあるかということを探りつづけてきた女性でもある。慶子は被爆者であると同時に華僑であるという意識を手放さず、それによって新たな孤独に陥っていく。

慶子は原水禁運動に加わったのとはほぼ同時期に日中友好の組織にも加わっていた。しかし中国国籍を持つ慶子がデモなどの直接行動に身を投じることは難しく、中国語を習ったり、「茉莉花」のしつらえを変えたり、「中国書店」という書店を新しく新地に開店したりすることが慶子の活動として選択された。慶子の活動は妹たちや親戚たちに快くは受け入れられない。北京系の慶子はこの活動を通して台湾系の新地の住民たちと疎遠になりもする。そこまでして進めてきた日中友好運動自体が分裂していく過程において、慶子と同胞や古い日本人の知り合いの間に対立感情が生まれていった。そんなとき、慶子は麻田が生きていればどうだったかと思いをめぐらせる。

麻田が生きていたら自分が現在のようであつたらうかとあと戻りさせることは慶子にはもうできぬことで、あくまで今の自分の立場に引据えて麻田の動向を想像しようとしていた。

その答えは単純ではなかった。あるいはそのとき恐ろしい孤独がおそうことにならなかつたらうか、とおもうと慶子ももうその想像を深追いするのをやめようとした。麻田晋の心の

深部に居坐つていたにちがいない放射能の恐怖とそれに突き動かされる孤独を知らなかつた自分をおもえば、華僑である柳慶子を麻田がしん底まで理解しなかつたとしても致し方がない、と彼女はそうおもった。(傍点引用者)

慶子は被爆者であることを通して麻田と同じ立場になろうと試みた。だが、慶子は被爆者であるのみならず、華僑であることを手放さなかつた。華僑であることを麻田の前で突き詰めようとするれば自分は孤独になつただろうと慶子は考えている。このような思念は、麻田と同じ立場であろうとしながら、自分が「放射能の恐怖とそれに突き動かされる孤独」を理解できずにいることの確認へと繋がり、慶子は二人の間にそれぞれ別の孤独が刻印されていることを認めざるをえなくなるのだ。

五 底に沈むもの

ここまで見てきたとおり、慶子と麻田は、それぞれ異なる孤独を生きて、死んでいった。本稿で追ってきた『樹影』における表現には、「伏在」、「底に沈んだ」、「底へ引込まれる感じ」、「心の深部」、「しん底」など、底流に沈められたものへのまなざしが散りばめられている。何かが言挙げされるとき、言挙げされない思いの残余が常に深く沈んでいくことが孤独と結びついて語られるのである。

麻田の死は慶子の心に重く沈むものをもたらし、慶子の死もまた別の人間に受け渡される。慶子の死について沈む思いを味わう

のは、麻田と慶子の關係を「とにかくいちばん知っている」麻田の弟だった。麻田の弟は慶子が弱い身体でピラ入れをし、突然の死を遂げたことに「腹立たしいような思い」を抱いて彼女の葬儀に参列している。

麻田の弟はその彼らから少し離れて、いちばん端に立っていた。彼はその位置から、参列の華僑たちを感じその中で、柳慶子はやはり中国人であった、とおもいはじめていた。最も長崎人らしかった慶子だが、やはり彼女は中国人であった、とそうおもうと彼の苛立ちが沈んでゆく。柳慶子に対して自分の何をいう立場があるう、という気もしてくるのだ。麻田の弟は流れる読経の声を聞きながら、今埋葬される柳慶子の最期がそうであったなら来年の初盆にはこの墓で、彼女のために爆竹を弾じかせてやろうか、とそうもおもいはじめて、空天に弾じける花火の光景を思い描いた。そこで弾じけるものは戦後長崎の二十二年を生きたひとつの命である。それは長崎の底深い痛みを負うで、激しく弾じけて消えたひとつの命に違いなかつた。(傍点引用者)

麻田は慶子の華僑であるという主張を好まなかつた。そのため慶子はその主張を生前の麻田の前で直截に表明することをやめた。しかし、麻田の死後の慶子を知る弟は、慶子の葬式を通して華僑である慶子に出会いなおしていくかのようなのである。慶子の無茶ややりきれない死に対する麻田の弟の苛立ちが底に沈み、中国の盆にあるべき爆竹は、長崎の人間としての麻田の弟が連想する

真夏の光景、すなわち日本式の花火として空高く昇るイメージに置き換えられる。異なる体験を持ち、異なる位相を生きた人物の死が、別の人間によつてとらえなおされていく。麻田が残した絵画を慶子が読みとり、その後の生き方に結びつけていったのもそのようなとらえなおしの一つであった。そして慶子の死は麻田の弟によつて、弾じけて消える花火として空中に思い描かれる。語られないままに沈められていった孤独。そのような孤独は、ひとくりにされえないものとして『樹影』の端々に書きこまれていた。孤独に触れた存在が、また別の孤独を抱え、生きていくという過程を『樹影』に見出すことができるのである。

注

- 1 佐々木基一、三浦朱門、黒井千次「創作合評」、『群像』一九七二年五月。
- 2 「昭和四十七年度野間文芸賞の決定 佐多稲子「樹影」、『群像』一九七三年一月。
- 3 例えば佐々木基一は「細君と麻田との關係、子供たちと親との關係、こういう麻田晋の家庭の事情はほとんど触れられていない。まあ意識的にぼかされてるように思える。そうした家庭の事情を書く」と、この小説全体のムードがガラッと変わってくるだろうと思いますね」と語っている(前掲「創作合評」)。
- 4 渡辺澄子「佐多稲子の『樹影』」、『文学的立場』一九七三年四月。
- 5 佐多稲子、聞き手・小林裕子「人生に対する敬虔さ——佐多稲子に聞く」、『新日本文学』一九七八年一月。
- 6 小田切秀雄「解説 絶望のリアリティと、行動のリアリティ」、佐

多稲子『樹影』講談社文芸文庫、一九八八年。

7 以下、本文の引用は佐多稲子『樹影』（講談社文芸文庫、一九八八年）に拠る。

8 この女性のモデルとなったのは、学徒動員中に三菱電機製作所で被爆し、鉄骨の梁の下敷きになって脊椎を骨折した渡辺千恵子である。一六歳で寝たきりとなった渡辺の生活は一九五四年八月四日の「毎日新聞」（長崎版）で紹介された。それをきっかけに多くの知己を得た渡辺の世界は次第に広がり、第二回原水爆禁止世界大会で母に付き添われてスピーチを行った（渡辺千恵子『新装版 長崎に生きる——「原爆乙女」渡辺千恵子の歩み』新日本出版社、二〇一五年参照）。